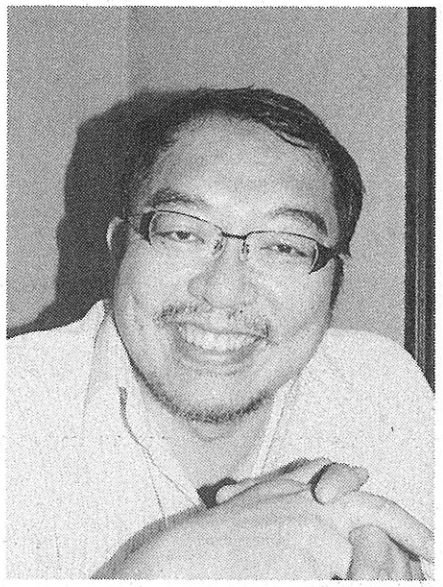
ベトナムの赤ひげ先生

フリー眼科医 服部匡志氏に聞く

1964年、大阪府生まれ。父親を胃がんで亡くしてから、医者の道を志すようになる。4年間の浪人生活を経て京都府立医科大学の医学部を卒業後、フリーの眼科医となる。ハノイ国立眼科病院で内視鏡を使った高度な手術で、多くのベトナム人の眼に光を取り戻している。ベトナムでは「神の手を持つ男」と呼ばれている。ベトナム国営放送が3日連続の服部匡志医師特集を組んだり、3月18日にはハイフォンで行われた医療機器贈呈式のニュースが流れた。



ベトナムで無償の医療活動を続けて11年。服部匡志（ただし）氏は現在、開業せず、どこの大学にも病院にも属さないフリーの眼科医だ。一カ月の半分は、北は盛岡から南は鹿児島まで約10カ所の病院を渡り歩き、診察と手術を行う毎日だ。残りの半分はベトナムの首都ハノイと地方に赴き、貧しい人たちへの無償の医療活動を続けている。自宅で丸一日、過ごせるのは年に一日から二日ほどしかない渡り鳥医療ボランティアを続ける「ベトナムの赤ひげ」服部氏に、その人生を尋ねた。

（聞き手＝池永達夫、ハノイで）

父の遺言「人の役に立て」

火付け役はマザー・テレサ

重症患者が多いベトナム

手術数は１万件以上

――自伝的著書「人間は、人を助けるようにできている」（あさ出版）があるが、そういう哲学を持つに至った経緯は？

そうしたレセプターを持っていたということだろう。僕自身は別に裕福な家庭に育ったわけでもないし、親が医者であったわけでもない。勉強も数学、物理は赤点ばかりだった。それで、高校の先生に医学部志向だと言うと、「こんな成績で行けるわけがない」と笑われた。ただ「一生懸命、死ぬ気でやったら2年ぐらいでいけるようになる」と助け舟を出してくれた。

浪人1年目は一日14時間机に向かっていた。それで2年ぐらいがんばったら、阪大も京大もA判定が出るようになった。でも本ちゃんがダメで、サクラは咲かなかった。結局、4年間浪人した。4年間の浪人生活は、経験しないに越したことはないが、不思議と今になって、この時の苦労が僕の人生で生きている。

今でも困難になればなるほど、心は燃え体の芯からエネルギーが溢れてくる。苦しみと喜びは対極にありながら、その二つは僕にとって一つの輪の中に存在する運命共同体のようなものだ。

浪人中は大阪中野図書館で勉強したが、たまたまマザー・テレサの写真集に出会った。写真集からはものすごいエネルギーが出ていた。どうしてこんなことが出来るのだろうと感銘を受けた。僕もいつかこんなふうになりたいと思った。それ以後、図書館に行くたびに、まずそれを見て勉強した。路傍に打ち捨てられた貧しい人々と正面から向き合い、生命の尊厳を守ったマザー・テレサを今も尊敬している。

だから貧しくて、何とかして欲しい人がいると燃えてくる。この国でも、金持ちはロシアに行って3万ドルとかの大金をはたいて、手術を受ける。無償でもそれに負けないものを、結果として残したい。

日本で買ってきた機械を使えば、外国に行かなくてもベトナムで手術が可能だ。それでも難しい手術では、成功の可能性はフィフティー・フィフティーというのも少なくない。そうした手術で患者が助かった姿を見ると、それだけで心は充足し喜びを感じる。

――そもそも医者を目指したのは？

高校生の時、父ががんになった。16歳の時、死の床に伏している父を侮辱した心無い医師の一言で、自分も医者になることを決意した。

こんな医師がはびこっていては世の中は良くならない。だったら僕がいい医者になってやる。そして病気で苦しんでいる人に報いたいと心底思った。オヤジは遺書をしたためていた。その手紙は次の四つの言葉で終わっていた。

「お母ちゃんを大切にしろ。人に負けるな。努力しろ。人のために生きろ」

オヤジは勉強しろと言ったことは一度もなかった。いつも説いたのは人の役に立つ生き方だった。

そのオヤジから、社会に出るための基礎を学んだ。

――ベトナムとの因縁は？

そもそも僕はボランティアするつもりはなかったけど、たまたま学会でベトナム人医師と出会ってベトナムの惨状を知ったのが契機となった。10年前のベトナムというのは、数年前のミャンマーみたいなものだった。車もほとんどなくて、まず1カ月滞在した。しかし、勤務していた病院から「ボランティアするなら病院を辞めろ」と言われたから辞めた。ただ何千万といい収入をもらっていたが、辞めるとなると勇気が要ったのは事実だ。

――ベトナムでは重症の患者が多いと聞くが理由は？

貧しい患者が多く、症状が悪化してから病院に来るためだ。だから手術の割合は、日本より断然高かった。手術で一番多いのは白内障だ。ベトナム戦争の頃には短かった平均寿命が延びていることが原因の一つかもしれないし、紫外線の影響も考えられる。

ただ、医療は手術がすべてではない。診療で患者の病気を的確に診察し、不安を和らげる精神的なケアも必要だ。

貧しい患者は手術費用を払えずに、治療を諦めて帰ってしまおうとする。遠い地方からハノイに来るだけでも交通費や滞在費など大きな負担だ。手術ともなれば年収の二、三倍が必要になることもある。

そういう人には、手術費用はなんとかするから、とにかく手術を受けるよう進言してきた。

――手術代をも肩代わりした患者は何人になるのか。

１０００人以上に上る。病気は待ってくれない。お金を作ってからでは、手遅れになるケースがほとんどだ。ベトナムでは即断即決を鉄則にしてきた。

――白衣を着ていないが、いつもその姿か。

診療をするときは、いつもYシャツだ。白衣が患者に与える威圧感みたいなものに抵抗を覚えるためだ。

――ベトナムでの手術数はこれまでに何件？

一万件以上になる。ただ、あるところから少なくなってきた。

――ピークは？

２００２年から始まって５年ぐらいたった２００７年ぐらいだ。どんどんメスを渡していくというのが僕のやり方で、とにかくベトナムの医療を前進させるためには先進技術の伝承が不可欠だ。そうした後輩が育ってきたことが大きい。まだ日本でも少ないのだが、網膜の手術を内視鏡を使ってやる。そうしたドクターを20人ぐらい育てた。

それで、そろそろミャンマーに行こうかなと思っていた時に、椎間板ヘルニアになった。1年半、すごく苦しんだ。腰も痛くて、とてもじゃないけどミャンマーどころの話ではなくなった。

――原因は仕事のやり過ぎ？

そうだ。とにかく日本みたいに、電動ベッドが動くとか、自分に合わせてアジャストできる椅子があるわけではない。私が来た時は、あるのはテーブルにただの木の椅子だけだった。

結局、横になっても痛くて寝れない。でも仕事があるし、何していても痛い。ヘルニアというのは普通、3カ月ぐらい入院して治る。でも入院している暇がなかった。

僕の場合は、フリーのスタイルだから、1カ月休んだら1カ月、収入はゼロだ。保険もなければ保障もない。もし日本で開業すれば、いい家に住んで、高級車に乗って、週末はゴルフといった生活が可能だ。

でもそれでは、僕の医師としての人生は続かない。やはり、心が燃えないからだ。

おいしいものをひとりで食べることが、どんなに寂しいものか。共感してくれる人がいない人生が、どれほど虚しいものか。誰かと一緒に食べるからご飯はおいしい。誰かと泣いたり笑ったりするから、人生はかけがえのないものになる。ベトナムでのボランティア医療生活はストレスだらけだ。それでも、心は燃えてくる。